

アマダイ通信NO.38

(Tile fish network letter)

03年残暑の候に

知人・友人各位

8月の冷夏を埋め合わせ、帳尻合せするかのように、残暑が続きますが、皆様、元気にお過ごしのことと思います。🐟は外の暑さを尻目に、空調の効いた駿河台の“ホテル”で、点滴の管を引きずりながら、キーボードを叩いています。

大学の寮で1年下の辻 恵弁護士が今度の衆議院選で大阪から立候補するとのことで、入院前日に、🐟事務所を事務局に「つじ めぐむ東京後援会」を発足させ、銀行と郵便局に口座を作り、励ます会を来月8日に学士会館で開くことにして、13日に駆け込み入院。昨年の勝部君の参議院補選に続き、熱い秋になりそうです。

ステージ b・・殆ど治る見込みなし！

脂肪壊死！で化膿したお腹の傷口を9針縫い直し、退院が1週間延びたことを除けば、万事順調な大腸がんと闘病生活ですが、何分にもこれから先のことが気にならないと言えば、嘘になる。何から何まで担当医に尋ねる訳にもいかないし、治療法にも諸説ある。癌と闘うなという先生もいれば、漢方や気功を取り入れる先生、抗癌剤に重きをおいたり、放射線を重用する先生もいる。消化器系の癌では初期のもの、末期のものを除き開腹して患部とその周辺を切除、併せてリンパ節も広く除去し、術後に抗癌剤を投与して再発と転移に備えるのが主流で、東大病院第一外科がリーダーシップをとっている。お世話になっている三楽病院の河野名誉院長や、大学の寮同期の群馬県立がんセンターの澤田副院長、羽村の山川医院の山川院長も東大第一外科の出身である。

7月に2回目の化学療法で入院中に「胃がんと大腸がん」という岩波新書を、よくまとまった教科書的な本だなと読み進むと「b・・ほとんど治癒する見込みなし」とある。生命保険会社に出す診断書にbとの記載があり、何だろうと思いながら、それまで読んだ本では解けなかった疑問が解ける。それにしても直る見込みなし！とは。他臓器への転移は認められず、腫瘍マーカーも正常というのに、これはなんだ！治癒する見込みがないなら生き方も考え直さなければ！因みにステージ ~ は進行の度合いを表し、粘膜・表皮・内皮・筋肉・外皮の腸の組織の外皮1枚を残すだけの🐟のそれが、は末期、リンパ節への転移がなければa、あればbということのようである。

2回戦も脱毛、吐き気、食欲不振、倦怠などの副作用はなく、5昼夜連続の抗癌剤の投与が終了すると、予定より1日早く5泊6日で退院。岩波の本だから変なことは書かないだろうし、著者は岡山大の高名な先生で根拠のないことではないだろう。さっそく山川君にメールを打つと、大丈夫だよ、治癒率は80%だとのことで、小心者？の🐟は一安心。

入院を延ばし、モルダバ川で泳ぐ

月一回の化学療法も2回戦まで終わった。次は8月9日の第二土曜に入院して・・まてよ、それでは盆休みは病院で終わりだ。可愛いナースに優しくしてもらっても、閉鎖空間に閉じ込められたまま夏休みが終わる。足掛け3年中野刑務所で過ごした70年夏の学生時代以来だ。あの頃は“全世界を獲得するために”という情熱に燃え、女のために人生を変えられるかと振り切って、敢て飛び込むほど意気軒昂だった。“夢も希望も青春も若さ

と共に消えて行く”とはこういうことか。1週間が耐えられないとは。今更、己の“墮落”を嘆いても始まらない。旅行会社のパンフレットを探す。西欧も北欧も一通り駆け足した。ロシアにも行った。次は東欧へ。89年秋、ベルリンの壁の崩壊を見て思わず流れた涙は何だったのか、モスクワ経由で、去年会えなかったレーニンにも会えれば・・・。

結局、フランクフルト乗継でベルリン、プラハ、ウィーン、ブダペストにそれぞれ2泊、パリ経由で帰ることにする。東ベルリンの川沿いの瀟洒なホテルに泊る。蒼い芝の庭先には白いヨットが繋がれ、太鼓橋の上を黄色い路面電車が走り、その先の古い教会の尖塔から鐘の音が響く。絵になる風景でつい泳ぎたくなるが、川面に浮かぶアオコを見て止める。あれほど頑なに東西の往来を拒んでいた壁も、壊れてみれば高さ3メートル、幅30センチほどのちやちなものだ。多少東ベルリンには廃工場や空地が目立つ気がするが、こちらが東であっちが西と言われてもよくわからない。プラハではかのカレル橋を船でも潜るが、ドナウ川では誰も泳いでいない。ウィーンへの途中、世界遺産のチェスキー・クルムロフでバスが止まる。古城と教会を巡ってモルダバ川が流れ、堰でゴムボートを滑らせたり、泳ぐ沢山の人々。幅20メートルほど、腰の深さもない。一瞬こんな小さな川で大人の大人がと思うが、ここは海から遥か遠い。日本海を我がプールとして育った●も郷に入らずんば郷に従えだ。が、まさかこんなところで泳げるとは。海パンはバスのトランクの中で昼寝、濃紺のボクサータイプのパンツなので、ま、いいかと川に入る。覆う物が1枚少なくなって、短パンの下の一物は心なしか軽やかである。

この夏のヨーロッパは記録的に暑かったらしいが、湿気が少ないのでしのぎやすい。ウィーンの新しいホテルには冷房がなく添乗員は気にしていたが、窓を開けて寝れば気にするほどでもない。ブダペストでは、ホテルの温泉の方がいいという現地ガイドの忠告を無視、ゲレルトの温泉に行く。チケット売場で千フォリント(500円)払うが、モギリの親爺が入れてくれない。チケット売りの婆ちゃんがくれたのは500フォリントの見学券らしい。婆ちゃんに入浴券を寄越せ、駄目なら千フォリント返せと連れが英語で迫るが、涼しい顔で知らん振り。これも勉強と諦めてホテルの温泉に入るが、中々快適で、日本から同行した海パンもようやく役目を果たす。

プラハではエヴィアンなど輸入飲料水は24コルナ(96円)ほどだが、国産品はその1/3ほど、カフェで飲むビールが1杯1ユーロと物価が安い。さらに看板の少なさ、街のくすんだ感じからドイツやオーストリアと多少経済格差も感じられるが、失業者が多いという割には街にはホームレスの数も少ない。高々半世紀の「社会主義」政権では、ハプスブルグ帝国5百年のストックを揺るがすほどの影響を与えることはできなかったのだろうか。89年のあの涙は、「社会主義」の無力さ、空しさへの涙だったのだろうか。

延安の娘

●の喉に魚の骨のように刺さったままの「文化大革命」、その総括を迫る映画ができたというので、久しぶりに映画を見る。“革命聖地”延安に下放された北京の中学生のその後の人生が、紅衛兵同士の間でできた娘の、親探しの旅をめぐって描き出される。かつての紅衛兵も今や50代。高等教育を受ける機会も失い、学歴も技術も持たず、北京に帰った者も苦しい生活を強いられる。そして改革・開放が進む中で、40代、30代のテクノクラートに追い越され、リストラにさらされる今、を描く。

ソ連や中国、社会党や共産党を見て、これは社会主義じゃない、理想の共産主義社会な

んてこれではできない、と●が考えた時、その疑問と諦めを氷解するかのように始まったのが、中国文化大革命だった。人間の魂を変える！永続革命を！ここにこそ人類の未来がある！大学1年生の●の人生もこれで大きく変わる。しかし●の人生に落とした影以上に、北京の中学生に落ちた影の方が大きかったようである。

11月より全国上映が始まります。現代中国を理解する上でも見逃せない作品です。

辻恵君、衆議院選に立候補

自らを早々とリストラして、塀の内側に転落、屈折した人生を歩むことになった●だが、多くの仲間達はそれぞれの思いを抱えながら実社会へ。順調に社会の階梯を上りながらも、世の中を変えようと、今一度、青春の志の実現を目指す者も。昨年の参議院議員の補選では鳥取選挙区から三鷹寮で2年下で、ベンチャーキャピタルを経営する元 KDD 社員の勝部君が野党統一候補で立候補したが、惜敗。今回の衆議院選では寮で1年下で勝部君同様同窓会世話人の、大手前高校出身の辻弁護士が、郷里の大阪の選挙区から民主党公認で立候補したいという。

遅まきながら立候補の二人であるが、三鷹寮の団塊の世代では前回の参議院選で森元恒雄、舛添要一の両君がそれぞれ旧自治省の組織と抜群の知名度を武器に当選、活躍している。かつて木造の旧寮の2階の端っこの寒い部屋にオルグに行くと、ドテラを着た舛添君が私は民社党支持ですからと言い、●の過激な意見には賛同してもらえなかった。野党から立候補してもおかしくない舛添君であるが、与党から立候補するのは自らの主張を政策に反映させやすいということか。残念であるが、自民党が万年与党でいる限り官僚も野党に情報を流さないし、有力な候補者も与党に行ってしまう。ここは辻君や勝部君、野党の皆さんに頑張ってもらって、もう一度、自民党政権を引っくり返し、政権交代可能な二大政党制を作りたいものである。

勿論、二大政党制が実現したとして、全てがうまく行く訳でないことは、現に二大政党制のアメリカやイギリスを見ればいい。取敢えず二大政党制を実現することによって、政が政たり、官が官たる状態が実現し、政と官の間にいい意味での緊張関係ができ、政・官・業の癒着も解消され、新しい政治がスタートする。その思いで10年ほど前、仲間と嵐を突いて民主党結党大会に参加した●であるが、民主党と自由党が合併して新民主党ができる今回こそ、そのスタート台にしたいものである。

東京駅で黄土高原写真展

延安の娘の試写会を見ながら、何故か大同にいる気分になった。高層ビルが林立し、東京で部厚いポックリで臍を出して闊歩するのが流行れば、北京の娘も臍出しのポックリで歩く。そんな北京から西へたった3百キロ、東京から名古屋や仙台の距離に大同がある。今でも時に3食食べるのに苦労し、飲む水にさえ事欠く村がそこいらじゅう点在する。これは中国内陸の農村の一般的な姿である。マーケットとして有望視される沿海の3億の中国。沿海の発展から取り残された9億の内陸中国。どちらも中国である。目に触れる機会の少ない内陸中国の現実を写真家の橋本紘二さんが、10月26日(土)から1週間東京駅丸の内北口改札ホールで見せてくれます。

これまで京都、大阪、広島、岡山、名古屋と JR 西日本、JR 東海の全面的なご協力を得て、沢山の方々にご覧いただき好評でした。今回は趣旨にご賛同いただいた JR 東日本

に無料で丸の内北口改札ホールをお貸しいただき、日本経団連自然保護協議会の各社に資金協力をいただき、緑の羽根の社団法人国土緑化推進機構と緑の地球ネットワークの共催で行います。前自民党政調会長、日中緑化促進議員連盟会長の亀井静香事務所にも大変お世話になりました。

留学生に今年も支援を！

留学生 10 万人計画もようやく達成され、数の上では大学の国際化も進んでいますが、質の点ではまだまだ。新生三鷹寮 東大三鷹国際学生宿舎の留学生からも、日本の会社に入り活躍、日本に帰化するOBが出て来ています。少子高齢化の進むこれから、優秀な留学生に沢山来てもらい、卒業後も日本で活躍してもらうことも必要です。又、日本で学んだことを母国のために生かしてもらい、併せて、日本との関係強化のために活躍してもらうことも大事です。そのためにも留学生へのカンパのご支援をお願い致します。

今回も畏友、前田和男同文社社長のご協力をいただき、5 千円以上カンパしていただいた本通信の読者の方に前田氏著「足元の革命」を進呈いたします。

汚水浄化装置の評判と ODA のあり方

前号でお知らせした中国の黄土高原 大同での、緑の地球ネットワーク (GEN) の汚水浄化装置に相次ぐ見学者の素朴な感想と、高見事務局長の感想を紹介します。

「私は趙二女といい、48 歳です。十数年来、南郊区平旺村で畑を借り、野菜を作っています。水がないので、砒務局の生活区からくる汚水を野菜にやっています。他の人たちも同じようにしています。この水は汚いし、臭気プンプン、野菜にもよくないことは、皆わかっています。でも、きれいな水なんてないし、汚水だって、ただ流したんではもったいない。だから畑にいれてるんです。そうすると、肥料分が多くなり過ぎたんですね、1 年、1 年、野菜がだめになってきたんです。とくにこの 2~3 年はひどくて、すぐ病気にかかったちゃんです。畑が汚水で汚染されたせいじゃないかと考えました。で、水をやるたびに、怖いな、と思ってたんです。はっきり思い出せないんですけど、この春のある日、流れてくる水が、突然、きれいになっちゃったんです。びっくりして、聞いて回ったら、植林の協力にきている日本人が、環境林センターのなかに、汚水処理池を作ったというんです。村の人と一緒に見にいいたら、処理池が 1 つあって、南から入る時は汚水なのに、北側にでる時はきれいなんです。それでよくわかったんです。この水なら、安心して野菜にやれます。土壌を汚染することもないし、野菜の病気や毒を心配しなくていい。安心して売れる。ですから、環境林センターの人に話したんですよ。日本の友人は本当にいいことをしてくれました。今度会ったら、よろしくお礼を伝えてほしい、とね。」

環境林センターで余った分を、外に流したんです。周囲の農民たちが、とても喜んでくれています。現地の環境林センター所長、小武の得意そうな顔も目に浮かびます。でもそれがよかったのか？いったんそうすると、それが当たり前になっちゃう。天候の加減なんかで、水が必要になったら、自分のところを優先せざるをえない。そしたら、はたからどう思われるか？水問題が、決定的な重みをもつだけに、慎重でなければならぬんです。大同の水問題の深刻さは、次の感想からも、わかります。話しているのは、石炭産地、左雲県で、小さな炭鉱の経営に参加している人です。

「小さな炭鉱はたいてい山の上であり、石炭を掘るうちに、地下水がだんだん深くなる

んです。炭鉱労働者は飲む水に困るし、風呂なんてどうしようもない。労働者たちは坑内で働いて、出てくる時は石炭でまっ黒。本当に風呂に入りたいが、できるのは大炭鉱だけです。あるのは汚水ばかりで、きれいな水はない。こんな小さな装置で浄化できるなら、水の悩みがなくなります。仕事を始めたばかりで、資金が緊張してるけど、ちょっと余裕ができれば、ぜひ作りたいですよ。高化龍（左雲県小炭鉱責任者）

実は、8年間ずっといっしょに活動した祁学峰が、いまは南郊区の党の副書記です。炭鉱も彼の担当です。そこも水がないところが多く、飲み水もない。廃坑には水がたまっている。その水を浄化できないか、頼まれたんです。浄化設備の基本設計をされた大阪産業大学人間環境学部の菅原正孝教授に頼むと、なんとかなりそうとの返事です。うれしいですね。共産党大同市委員会副書記の、梁鳳書書記の評価を最後に引いておきましょう。

「小規模汚水がわが市の環境に与える悪影響は、軽視できない。たとえ流量は少なくとも、周囲の土壌と水源にたいする汚染は深刻です。小規模汚水を処理することはわが市の環境保護対策が直面する重要な課題です。環境林センターの汚水処理プロジェクトは、小規模汚水問題を解決するための貴重な試みです。このプロジェクトの建設は、環境林センターの周辺数百ヘクタールの土地と水源汚染を改変するだけでなく、わが市の小規模汚水処理にとって、非常に重要なモデルとなるものです。このプロジェクトは日本大使館の絶大なる支持と高見邦雄さんの助力によって建設されたものであり、わが市の環境保護に対する新たな貢献です。十数年来、彼らが大同の環境のために果たした貢献は誰もが敬服しています。私は300万大同人民とともに、謝意を表します。」

私たちの協力は「木」で始まり、そのなかで、「水」と「土」の重要性に気づいた。水、木、土。「金」がぬけてますね。お金の苦勞がだんだん重くなり、少しも安定しないのは、そのせいでしょうか？今回そのお金、草の根無償協力資金を出していただいた日本大使館の目賀田公使（経済部長）からのメールで終わりにしましょう。「GENの事業は、今後の中国へのODAのモデルともなると期待しておりますので、宜しくお願いします。私は、9月4日に北京を離れ、東京経由で9日にパリ（OECD本部）に赴きます。後任は、渥美という者が、30日に着任します。今後とも、高見さん及び環境林センター等の事業のご成功とご発展をお祈り致します。目賀田」。せっかくここまでできたのですから、なんとかこの局面を乗り越え、新しい発展の軌道に乗せたいものです。

食料・農業・農村政策の動向と課題・・・Dネット第35回勉強会より

風呂に入る水、飲む水にさえ苦勞する“高度成長”の中国からも、食料という形で水を輸入する日本。議員定数不均衡に守られた自民党農林族のゴリ押しと農協の既得権のため、遅々として進まない農業の規模拡大と効率化。果たしてそれで日本の食糧安全保障と日本農業の未来はあるのか？団塊政策研究ネットワークの政策研究会での、政府の審議会の座長も勤める小源寺真一東大農学部教授（550年東大三鷹寮入寮）の講演を、🐷が以下に簡約しました。

最初は食料の自給率の問題について話します。日本の農業はとり肉とか卵、豚肉などの生産性は結構高いのですが、土地を使うのは弱く、典型がお米です。減反政策の見直しでかなり議論をしてきた経緯もあり、次に、減反の問題を農業問題の代表として話し、三番目に農地の問題について、国民全体に関わりの深い問題なので、お話したいと思います。

1. フードセーフティとフードセキュリティ

最近、食の安全の問題が随分脚光を浴びています。BSE(狂牛病)問題をきっかけに安全性の問題が食料政策の前面に出て食料安全庁が、農林水産省の中にも消費安全局ができ、随分政策が変わりましたが、量の問題も依然良くありません。質の安全がセーフティの問題なら、量の問題は「食べられるか」ということで「フードセキュリティ」と呼ばれます。いつの間にか国内の農業なり食品産業が地盤沈下を起こし、気がつくとも量の問題で非常に深刻な状態になるという意味で、質の問題と量の問題は密接にリンクします。

現在の日本の食料自給率は供給熱量ベースで40%ほど、金額ベースで7割ぐらい、他の先進国は自給率の上がり過ぎで困っているのに、日本は下がり続けて4割で何とか踏み止まっている状況です。1961年の農業基本法で経済成長に日本の農業、農村をどうアジャストさせるか問題となりました。当時の自給率は8割なので日本農業はどんどん衰退していると思いがちですが、80年代半ばまで日本の生産は相当伸びました。40年間で肉は5、6倍、卵でも3、4倍、牛乳もそれくらい消費量が増えました。蛋白質の生産には穀物が必要で、どっさり外国から輸入しているのが自給率低下の基本的な要因ですが、「だから自給率を上げなければ」というのは短絡的です。

食糧の安心の最後の砦、エネルギーさえ取ればという場合には、率ではなく絶対的な量が問題になります。ただ農家は国の自給率を上げるために農業をする訳ではなく、いい値で売れたり、消費者が喜ぶので作ります。だから花でいい、野菜も余りカロリーがないが構わない、今は自給率に貢献しなくても、人と土地があれば十分です。いざというとき日本列島の上に暮らしている人たちが何とかしていける保障がある種の安定感をもたらし、冷静な判断なり安定した行動がとれる。花や野菜や畜産等に人が入っていますし、直接自給率に貢献しなくても農業に情熱を注ぐことができる面白い経営を選んでもらうのが、結局は農業にとって良いと思います。

2. 動き出す米政策・水田農業政策の改革

次に減反ですが、1970年に本格的に始まり、水田の4割近くが対象になっています。一種のカルテルで、供給量を絞ることで価格をある水準に保持する。だから農家や農協などが主役でやるのが大きな流れとしてある。米は60年代の半ばまで輸入していたが、食べなくなり、できるようになり、あっという間に作り過ぎ状態になった。政府が買って売っていたから、在庫を抱え処分するということで政府の財政の問題になり、農協に協力を求める形でスタートして色々ねじれが生じた。食管制度を守るために減反する、そのために農業団体に協力を求め、お金もつける。消費者を守る意味合いの強かった食管制度も、60年代には生産者を守る意味合いが強かったが表面に出なかった。1994年の新しい食料法で旧食管法的な規制的手法は相当外れ、特にお米の値段は市場で決まる形になった。その前から「闇米」「自由米」はかなりの量になり事実上流通規制は形骸化し、追認した。流通の方は規制緩和が進むが、生産の方は全然変わらない。

これまでは国と都道府県、市町村が主体となって減反の面積を決めて配分していました。これを2008年にやめ、もし農業者がやるならそれが主体となって配分するシステムに変え、その時期を明示しようと食料庁が提案した。紆余曲折があり、結果的にさ来年度から新しい減反、生産調整の仕組みにする、ただ国や都道府県や市町村はしばらくの間関与する、つまり農業団体といっしょになって配る、ただ強制感のない形にする、こういうメリットがあるからということで生産調整に納得尽くで入る、どうしても納得できないなら、

それも認め、もう少し風通しのいいことにしようということになった。そして2008年に国ではなく農業者団体が主役になって配る形にしようと思った。

農業団体はこんな無責任なことがあるか、国が手を引くのはけしからんと。一番苦労しているのは市町村の役場の職員、次に都道府県。ただ国がやっていることを農業関係の全国組織の全中に、都道府県のやっていることを県の中央会に、役場のやっていることを農協にやってもらう。これもまた無責任なことで、よそで決まった基準を段々配っていくのですから、最後は権力のお墨付きがいる。その仕事をそのまま中央会にやらせるのは無理です。ですから「主役の交代」と言ったときに、新しい主役にふさわしいストーリーが別途用意されて、ワンセットでさあ、どうですかというのが本来の話だと思うのです。

市町村や農協の職員の方たちの仕事が根本的に変わる筈です。これからは条件と参加した場合にはどうなるか、丁寧に正確に説明するのが仕事になる。もう一つは、これまで霞ヶ関と大手町で決まったことが農村において、その背景に権力的なものがあるシステムでしたが、今回はそれぞれの市町村や都道府県で去年、一昨年で作ったお米の内どれだけ売れたかをチェックし、その実績に応じて次の生産目標数量を設定します。国全体としては今900万トンぐらいお米を食べています。それに合わせて次の生産目標数量を設定し、都道府県別にあるいは市町村別に分ける時にものをいうのは前の実績です。そうなるとその市町村がお米の売り先を開拓して安定的に売ることができれば十分で、いいものを作れば売れるわけです。その実績が目標数量に反映されるシステムを作ろうということです。減反の配分というよりはマーケティングの成果が次の生産の量につながる訳ですから、役場の人たちに任せてはダメということになると思います。

3. 腰を据えた議論が必要な農地問題

2000年3月の農地法改正で、条件付きながら株式会社による農地の取得権が認められた。農地を持っていい農業生産法人の1タイプとして株式会社形態を認めた。平たく言えば農家が株式会社を作り、そこに外から4分の1まで資本参加できる。又、特に農業生産法人は農業生産法人資格を得たとたんに農業以外のことはやってはいけないとなっていました。半分までは農業以外のことをやってもいいことになった。画期的なことです。考えてみれば、農業以外の産業で例えば新日鐵に、鉄工業以外のことをやってはいけないというのは死刑宣告に等しい。産業の範囲を決めることに意味のあるのは行政とか統計にとつてで、ビジネスをやろうという時に指定された範囲を越えてはならないとなると大変困る。むしろ農産物を加工したり、外食産業に進出したり、進出を受け入れたり、広げていくよりも厚みをつける方が重要です。農業生産法人だから農業以外のことはいけないというと、植木などもできず、別会社を作らなければならなくなります。

農業の参入の自由度を認めるべきとの意見に対し、本当に農業をやる気ではない、土地が自分のものになると必ず悪さをする、転用してぼろ儲けするから色々規制をかけるのだという意見が出ます。今はそういう規制ではなく、すでに既得権を持っている農家とか農家の集まりの延長線上にある農業生産法人は農地を使ってもいい。つまり資格規制ですが、その人たちが悪さをして余り規制しない。議論としては計画的な土地利用をきちんとすることが先決で、その後でやりたい人がいたらやってもらい、おかしいことをやったら取り上げる制度を作るべきです。

農地制度や土地制度の問題が、これからの日本の農業や日本の社会にとって大きな宿題として残されているということで、お話を終えさせていただきます。

日本の美 飾りの世界・・・三鷹クラブ第 50 回定例懇談会

三鷹クラブの定例会も第 50 回。この記念すべき回の講師に、辻 惟雄さん（美術史家、多摩美術大学前学長、昭和 26 年入寮）をお招きしました。

辻さんは、岐阜県出身、高 3 の時日比谷高校に転入し、理 に進みました。当初は下宿に入ろうと思ったので、5 月になってから入寮手続きを行ったそうです。夏休みに帰省の途次立ち寄った志摩半島で食べた貝類のせいか、腸チブスのような病気にかかり、慌てて家に帰りましたが、40 度前後の高熱が続きました。秋になっても学校に帰ることが出来ず、結局その年は休学、三鷹寮も退寮の形となり、実質在寮期間は 2 ヶ月足らずでした。発熱した前後が記憶喪失状態になったこともあり、三鷹寮で思い出せるのは、2 段ベッドの寝室と同室の文学好きの人とフランスの小説について話し合った位だそうです。

辻さんが理 に入ったのは、父上がお医者さんで医学部に進むためでしたが復学後、進学試験がうまく行かず、合計 4 年間教養学部で過ごすことになりました。その結果、人気のなかった文学部美学科に進み、美術史を専攻するというのが、最後に選んだ道でした。もっとも、高校時代から絵を描くのが好きで、駒場寮に入り直した時には美術サークルに属し、美術に関心があったことが美学科に進む背景となったそうです。医学部にすんなり入っていたら、今日の辻さんはなかった訳ですから、人生はわからないものです。

大学卒業後は、順調に専門の美術史の研究をつづけ、文学部の助手から、国立文化財研究所勤務を経て東北大へ、そして昭和 56 年には東大教授に就任しました。東大退官後も、日本文化研究センター教授、千葉市立美術館長を歴任、平成 11 年から今年 3 月まで、多摩美術大学の学長を勤められました。

辻さんは、美術史研究の第一人者として学界で業績を重ねられるとともに、優れた日本美術を内外に普及する活動にも力を注いで来られました。今回お話いただく「日本の美 - 飾りの世界」は、辻さんが企画、構成して昨年ニューヨーク（ジャパンソサイエティ）、今年ロンドン（大英博物館）で開催し、絶賛を博した展覧会と同じテーマとさせていただきます。一口に「飾り」と言っても範囲は広く、絵画、彫刻や茶道、華道などにかかわる美術品はもとより、甲冑、刀剣などの武具、大名の調度類、衣服、帯をはじめとして簪、櫛など、身辺を飾るもの、祭りなどの行事に関するもの等々...日本人の生活に根ざした品々を、改めて取り上げると、そのデザインの大膽さ、華麗さ、そして洗練された美しさに驚かされます。それらは、江戸期に完成の域にあり、欧米で高く評価され、ジャポニズムとして各方面に多大の影響を与えました。辻さんは、一般の人にもわかり易い話をしたいとおっしゃっています。会員の皆様ばかりでなく、関心のある家族の方等も含め、多数ご参加下さるようお待ちしております。（文責平賀）

日 時 平成 15 年 9 月 29 日（月）18 時 30 分～21 時

会 場 学士会館本館 320 号室（千代田区神田錦町 3-28 TEL:03-3292-5931）

会 費 5,000 円（会場費、夕食費等を含む）

申込先 平賀俊行 FAX 03-5297-5020 TEL 03-3256-0559 緑富士（株）

干場革治 FAX 03-5689-8192 TEL 03-5689-8182 （有）ティエネットワーク

◆ホームページを作りました

アドレスは <http://www.tilefish.co.jp> です。取敢えず◆通信のバックナンバーが 21 号から 35 号まで入っています。興味のある方はのぞいてみて下さい。 再見！